

佛説阿彌陀經

姚秦、龜茲ノ三藏、鳩摩羅什譯ス

是ノ如ク、我、聞ク。

このように、私にも、聞こえねばならぬ。

一時、佛、舍衛國、祇樹・給孤獨・園二、在シキ。大比丘ノ僧、千二百五十人ト、俱ナリキ。

もったいなくも、ほとけが、名利争伐の、シュラーヴァスト幕下に、自ら、お出ましになられるということがあった。はたして、ジェートリ殿下の宮下にては、アナータピンダダ卿の主権になる、歓樂園、すなわち、おおにえのうたげに於て、遊ばれていたが、そのような時でさえ、絶大の、修道会のことは、決して、お忘れになっていたのではない。

皆、是レ、大阿羅漢ニシテ、衆マタノ知識スル所タリ。

かれら、千二百五十人、全員が、これ、世をみそなわす、偉大な聖者であり、その人となりは、衆人の認めるところである。

長老、舍利弗、摩訶目乾連、摩訶拘絺羅、離婆多、周梨槃陀迦、難陀、阿難陀、羅喉羅、憍梵波提、寶頭盧・頗羅墮、迦留陀夷、摩訶劫賓那、薄俱羅、阿尼樓駄。是ノ如ク等ノ、諸々ノ、大弟子、并ニ、諸菩薩摩訶薩。文殊師利法王子、阿逸多菩薩、乾陀訶提菩薩、常精進菩薩。是ノ如ク等ノ、諸々ノ、大菩薩、及ビ、釋提桓因等ノ、無量ノ、諸々ノ、天ノ、大衆ト俱ナリキ。

すなわち、重鎮である、シャーリプトラ、マハーマーウドガリヤーヤナ、マハーカーウシュティラ、レーヴァタ、シュッディパンタカ、ナンダ、アーナンダ、ラーフラ、ガヴァンパティ、バラドヴァージャ、カーローダイン、マハーカッピナ、バックラ、アニルッタ

などの、偉大な、弟子社中と、並びに、淳朴にいらせられる、マンジューシュリーや、アジタ、ガンダハスティン、ニトウヨードウユクタ、アニクシプタドウラなどをはじめとする、諸々の、偉大な、菩薩、すなわち、仁在人たちからなる、教会社中と、それに、シャクラ、すなわち、インドラ神や、ブラフマン、すなわち、サハーンパティ神などの、無量の、神霊の、参裕団が、添いまつりもうし上げているのであった。

爾ノ時、佛、長老、舍利弗ニ、告ゲタマワク。

さて、みほとけが、社命人、シャーリプトラ、すなわち、恩騰子に、仰せられる。

是ヨリ、西方、十萬億ノ佛土ヲ過ギテ、世界有リ。名ヅクルニ曰ク。極樂トナリ。其ノ上ニ、佛有リ。阿彌陀ト號ス。今、現ニ、在シマシテ、法ヲ説キタマウ。

仏国土を求めて生きる者が、十萬億ほどもある、佛国土の事に与かるべく、経歴しながら、すなわち、「あとかた」という観点に立った時、その人には、「極樂土」とも名づくべき、ある世界が、開かれて、有るであろう。

そこでは、サンミヤクサンブツダ、すなわち、裏立者にして、「アミターユス」、すなわち、「未済仁〔悠遠の仁風〕」とも名の立つべき、如来、すなわち、救世主が、やはり、法理をして、いまに、趣向せしめたまう。

舍利弗、彼ノ土ハ、何ノ故ニ、名ヅクルニ、極樂ト為スヤ。其ノ國ハ、衆生、衆苦有ルコト無シ。但シ、諸樂ヲ受クベシ。故ニ、極樂ト名ヅク。

シャーリプトラ卿、誰という、因由によってか、そのような、世界としての、場が、すなわち、「極樂国」というふうに、弁証される次第となるのであろうや。

また、シャーリプトラ卿、極樂土という世界では、諸英霊たちの、苦そのことが無いのであり、樂も、また、ただ、本のままに在るはずであるが、まさに、その意味で、そのような、世界としての、廷こそが、すなわち、「極樂国」という空間ではあろう。

又、舍利弗、極樂國土ハ、七重ノ欄楯。七重ノ羅網。七重ノ行樹タリ。皆、是レ、四寶ノ周匝シ囲繞スルナリ。是ノ故ニ、彼ノ國ハ、名ツケテ、曰ク、極樂トナリ。

しかるに、また、シャーリプトラ卿、極樂土そのものが、すなわち、「世界」のことでもあるのであり、したがって、数理の冊柱や、感性の網網や、認識の順列などが、整っているのでもある。すなわち、浄土へと向かうべき、決意人には、周りの国土は、金・銀・瑠璃・頗璃・という、風致形勢の、四科による敷設の備わった上に、形作られており、しかして、まさに、極樂の名にふさわしく、色や形〔カタシェイブ〕に於て、整えられても見えるであろう。

又、舍利弗、極樂國土ハ、七寶ノ池有リ。八ノ功德ノ水、其ノ中ニ、充滿ス。池ノ底ハ、金沙ヲ以ッテ、地ニ、布ク。四邊ハ階道ニシテ、金・銀・瑠璃・頗梨・ノ合成スルナリ。

更に、シャーリプトラ卿、極樂國も、世界の常として、沢沼池の七科を、その、風土基盤としてはおり、池の水も、八支の成分内容を満足して、豊かに、湛えられているが、しかるべき人ならば、その身そのまま、沖に、うち出ることできるし、他の、烏合の衆らも、恩浴に預かることはできる。すなわち、金から成ってはいるが、ここにも、堆沙洲は、存在する。

また、その池の、内から、四方に、目をやれば、それぞれに、対応して、しかるべき方面に、諸々の、色模様が、いわば、突堤のように、観測されることになっているが、これも、また、金・銀・瑠璃・頗梨・の四科による敷設の上での現象ではある。

上ニ、樓閣有リ。亦、金・銀・瑠璃・頗梨・車渠・赤珠・馬瑙・ヲ以ッテ、而モ、之ヲ、嚴飾ス。

その人が、周りの、沢沼池を見渡せば、岸辺のあたりには、諸々の、心柱が、敷設されており、それぞれの、色模様を見せているのが、観察される。あるいは、金とも見え、あるいは、銀とも見え、あるいは、瑠璃とも見え、あるいは、頗梨とも見え、

あるいは、珊瑚とも見え、あるいは、馬瑙とも見え、あるいは、琥珀とも見えるが、これも、また、七科による敷設の上での存在ではある。

池ノ中ノ、蓮花ノ大キコト、車輪ノ如シ。青色ナルハ、青キガ光タリ。黄色ナルハ、黄ナルガ光タリ。赤色ナルハ、赤キガ光タリ。白色ナルハ、白キガ光タリ。微妙ノ香ノ、潔ケルナリ。舍利弗、極樂國土ハ、是ノ如クノ、功德ノ、莊嚴スルヲ、成就セルナリ。

その、沢沼池には、そこに、生まれた人々が、座標となすべき、諸々の、蓮の花が、青や、黄や、赤や、白などの色をして、生えているが、それぞれ、その人々の、特色に応じて、そのように、殊妙に、輝くのである。

また、それらの、大きさなどは、それらの人たちが、ここに至るまでに、使ってきた、戦車の、幅などの、規格によって、決まっている。

、このように、シャーリプトラ卿、浄土も、また、それに向かう、決意人たち次第で、色や型 [スビジョン] に於て、調整されうる余地があると言えよう。

又、舍利弗、彼ノ、佛國土ハ、常ニ、天ノ、樂ヲ作ス。黄金ヲ地ト為セリ。晝夜、六時ニ、天、曼陀羅華ヲ、雨フラス。其ノ國ノ、衆生、常ニ、清旦ヲ以ツテシテハ、各々、衣被ヲ以ツテ、衆マタノ、妙華ヲ盛り、他方、十萬億ノ、佛ヲ、供養センニ、即チ、食ノ時ヲ以ツテナシ、還リテ、本國ニ到リ、飯食シ、經行ス。舍利弗、極樂國土ハ、是ノ如クノ、功德ノ、莊嚴スルヲ、成就セルナリ。

しかるに、シャーリプトラ卿、浄土に、上がった、かの人々は、即興演奏される、楽の音を、聴きながら、それとともに、仏国土の、常日頃、すなわち、さやけさをこそ、聞くことになるであろう。それにまた、その国土は、いつもとかわらず、黄金の大地であることも、担保されるのでなければならぬ。すなわち、そこに立った人は、昼夜を分かたず、日中の、榮華を、目の当たりにする。そのつど、そこに於て、雨ふっているのは、倫常花たる、マーンダーラヴァである。

その国にも、他の、諸世界に、疎通する、英霊たちが、現住し、当然、如来様に対し奉る、供養灌注という、本来の、生活から、はずれることはないが、また、一方で、

それぞれの分音に応じて、新たな客の、十萬億土の徳を、称えつつ、その、經行人の、世界に於て、仏陀、すなわち、覺英仁の、礼を尽くすべく、来たり迎えるであろう。

このように、決斎人本人によっても、浄土の、色や形〔英語イメージ〕は、整理されうるといえよう。

復夕、次ニ、舍利弗、彼ノ國ハ、常ニ、種々ノ、奇妙ニシテ、雜色ナル、鳥有リ。白鶺鴒・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命之鳥。是クノ、諸々、衆タノ、鳥ハ。晝夜、六時ニ、和雅ノ音ヲ出ス。其ノ音、五根・五力・七菩提分・八聖道分。是ノ如ク等ノ、法ヲ、演暢ス。其ノ土ノ、衆生ハ、是ノ、音ヲ、聞クコト已ニシテ、皆ナ、悉ク、佛ヲ念ジ、法ヲ念ジ、僧ヲ念ズ。

また、更に、シャーリプトラ卿、佛國土そのことにあつては、白鶺鴒・孔雀・鸚鵡などの、他の世界から、渡来した鳥たちも、シャーリ・カラヴィンカなどの、浄土特有の鳥たちの、勤めを果たすのでなければならぬ。もちろん、それら全てが、実は、共命之鳥と呼ばれる、不死鳥のことでもある。

彼等は、昼夜の別無く、すなわち、日中人の為とて、現れるや、しばしば、戯曲を演ずるが、それが鳴りわたっている間、浄土の様子が、その演目に応じて、進んでゆき、彼等が、何か、言葉を、伝えようとするのが、感ぜられる。

そのような、人称状況の中へと、そのような、言語情況を通して、臨上する時、そのつど、そこで、真情人が、自覚される。すなわち、格心人として、需与せられるであろうとともに、また、自ら、公衆人として、与存する。

舍利弗、汝、此ノ鳥ハ、實ニ、是レ、罪報ノ生ム所ナリト謂ウコト勿カレ。所以ハ、何ンゾヤ。彼ノ、佛國土ハ、三惡趣無キナリ。舍利弗、其ノ、佛國土ハ、尚シ、三惡道ノ名モサエ無シ。何ンゾ、況ンヤ、實ニト有ランヤ。是クノ、諸々、衆マタノ鳥ハ、皆ナ、是レ、阿彌陀佛、法音ヲシテ、宣流セシメント欲シ、變化シタマイシ、作ス所ノモノナリ。

シャーリプトラ卿、動物性と疎通しているのでなければならぬのが、そのような、英霊のことであつた、者たちではあろうが、しかし、以上のようなことも、また、注

目されるわけである。

誰としている、因子から、シャーリプトラ卿、そのようなことが、起こるのでもあろうか。そもそも、佛国土に於て、囚役中である者は、実在しないし、生き死にを世間とせねばならぬ、禽獣たちが、名目だに、自存のありようもないはずである。

ところが、そのような、賛翼社中の、者たちは、そのような、「アミターユス」としておった、ものごとのことにもあられる、如来によって、その国土で生き延び、しかも、法理としての言葉を、演じてゆくのである。

このように、色や型 [パターン] ということに於ても、シャーリプトラ卿、決斎人たちが、浄土そのことをして、整均あらしめてゆくともいえよう。

舍利弗、彼ノ、佛国土ハ、微風、吹キテ、諸々ノ、寶ノ行樹、及ビ、寶ノ羅網ヲ、動カシ、微妙ノ、音ヲ、出ス。譬エバ、百千種ノ樂、同時ニ、俱ニ、作セルガ如シ。是クノ、音ヲ、聞ク者、皆ナ、自然ニ、念佛・念法・念僧・ノ心ヲ、生ズ。舍利弗、其ノ、佛国土ハ、是クノ如クノ、功德ノ莊嚴スルヲ、成就セルナリ。

更に、また、シャーリプトラ卿、仏国土に於ては、諸々の、そのような、認識の順列のことであつた、場としてもいる、そのような、感性の綱網のことであつた、者たちに、起こる、さざめきの微風の上でこそ、微妙な、言葉も、また、心に迫ることとなるのであつて、シャーリプトラ卿、十萬億土を、一貫する、廉直性の上の、和声性に対して、共鳴すべき、諸々の、品行性によって、絶佳なる、言葉も、また、演びゆくといえよう。

すなわち、シャーリプトラ卿、諸々の、そのような、認識の順列としておつた、廷のことである、そのような、感性の綱網としておつた、者たちに、本来、備わる、さざめきの微分の中でこそ、絶妙に、言葉が、心を打ってくるのである。

そのつど、そのような、人称状況の中で、そのような、言語情況にと、親臨する時、すなわち、佛陀という信念が、その体位に、重なり、理法という概念が、その体調に、重なり、結社という観念が、その体格に、重なる。

このように、色や形 [シェイプ] に於てさえ、シャーリプトラ卿、浄土は、また、諸々の、決斎人たち本人によって、整えられることになるともいえよう。

舍利弗、汝ガ意ニ於テヤ、云何。彼ノ佛、何ノ故ニ、阿彌陀ト號シタマウヤ。  
舍利弗、彼ノ、佛ハ、光明、無量ナリ。十方ノ國ヲ、照シテ、障礙スル所無シ。  
是ノ故ニ、號シテ、阿彌陀ト為ス。又タ、舍利弗、彼ノ佛ノ、壽命、及ビ、其ノ、  
人民、無量無邊阿僧祇劫ナリ。故ニ、阿彌陀ト、名ツク。

では、そのようなことから、また、どのようにも、認知できるのであろうか。シャ  
ーリプトラ卿。何ごとという、作用があって、そのような、「如来」のことにあられ  
たる、御仁、すなわち、「アミターユス・未済仁〔遼遠の仁風〕」そのことが、あえて、  
名にし負うこととなつてゆくのであろうか。

ところが、一方で、シャーリプトラ卿、そのような御方の、事に嘉せん、とおわし  
ましようはずの、如来様、すなわち、そのような、人稱状況こそ、事に預かるべし、  
とはあろうばかりならんも、なお、未だ、上場これならずにはいる、命祿そのことが、  
いずれ、予程としておるでもあろう。

もはや、そのような、因由があって、けだし、そのような、「如来」のことにおか  
れたる、御仁は、うたた、「アミターユス・未済仁〔永遠の仁風〕」そのこととて、名  
に負うのである。

舍利弗、阿彌陀佛ハ、成佛シタモウテヨリ、已来、今ニ於テ、十劫ナリ。舍利  
弗、彼ノ佛、無量無邊ノ、聲聞ノ、弟子有ツテ、皆ナ、阿羅漢タリ。是レ、算數  
ノ、能ク、之ヲ、知ル所ニ非ズ。諸々ノ、菩薩モ、亦タ、復タ、是クノ如シ。  
舍利弗、彼ノ、佛國土ハ、是クノ如クノ、功德ノ、莊嚴スルヲ、成就セルナリ。

それはともかく、シャーリプトラ卿、そも、如来の、事に与かろう、とてあるべき、  
十科そのことは、なおし、未央たりける、サンミヤクサンボーディ、すなわち、公正  
履道場、すなわち、「ひのもとのかに」そのものを通して、いずれ、アピサンブダ、  
すなわち、新（現）成仏者、すなわち、あまてらすの、御事に預かるべく、つとに、  
代数として、準備されてあったわけである。

そのようなことから、もはや、何ごとが、認められようか。シャーリプトラ卿。そ  
れは、そもそも、誰という、作用によってや、そのような、「如来」としてあらせた  
る、御仁、すなわち、「アミターバ・無遮仁〔引対人〕」が、あえて、名にし負うこと

となるかということであろう。

ところで、一方、シャーリプトラ卿、そも、そのようなことのことにあられましようはずの、如来様の、事に与かるべくはおろう、現実境そのものは、未だ、厳立しておらず、ただ、誰もかれもが、仏陀、すなわち、覚明仁、としておるべき、田野そのこと、すなわち、ひだかみのくに に於て、準備できてあるばかりでもある。

もはや、そのような、因由があつて、けだし、そのような、「如来」のことにおかれたる、御仁は、なおし、「アミターバ・無遮仁 [引対人]」とて、名に負うのでもある。

それはともかく、シャーリプトラ卿、如来の、事に預かろうはず、とてはあるべき、推量不可能な、令名者らの社会が、いまや、その、定員数の確定される必要もこれ無きまま、やがて、諸々の、見そなわす、「阿羅漢」がた、すなわち、やおよろずがたの、事に与からん、とはしているでもあろう。

このように、シャーリプトラ卿、浄土は、諸々の、決斎人たちによってでも、また、色や型 [ビジョン] に於て 調整されうる余地が有るとは言える。

又タ、舍利弗、極楽國土ハ、衆生、生レナバ、皆ナ、是レ、阿鞞跋致タラン。其ノ中ニ、多ク、一生補處ナル者有リ。其ノ、数モ、甚ダ、多シ。是レ、算數ノ、能ク、之ヲ、知ル所ニ非ズ。但シ、無量無邊阿僧祇劫ヲ以ッテ、説クベケン。

ところが、更に、シャーリプトラ卿、諸々の、およそ、アミターユス、すなわち、如来の、所管とてある、佛国土に於て、英霊らのこととてあらん、者たちも、いずれ現住するのでなければならぬのであつて、諸々の、純正の、菩薩たちは、当然、遵守すべきところであるのは言うまでもないが、また、絶対生涯者として、契りておられる、そのような、シャーリプトラ先生、菩薩たちの掌上にとはこれおるべくしてあつたばかりでも、しかも、なお、高度には、有効しもする、直観をこそ通して、名乗り上がることのできたる、御方がたが、ほとんど、無限大に通ぜよとばかりあられつつ、ご社交くだされるであります。

舍利弗、衆生ニシテ、聞ク者、應サニ、當サニ、願イヲ發シテ、彼ノ國ニ生マレント、願ウベシ。所以ハ、何ンゾヤ。是クノ如クノ、諸々ノ、上善人、俱ニ、



一處ニ、會ウヲ得タレバナリ。少ナキ、善根・福德・ノ因縁ヲ以ッテ、彼ノ國ニ、生マレルコトヲ、得ルベカラザレバナリ。

また、一方、シャーリプトラ卿、そのつど、仏国土に於ては、もとより、諸英魂たちによって、いずれ、本懐が、現効せられあらねばならぬが、そのようなことが、誰という、因子の方から、許されているのであろうか。

すべからく、名義そのことは、同時に、諸々の、「色や形」そのこと〔英イメージ〕の有るところをまって、はじめて、成立するわけであるから、諸々の、実存の、賓客たちによっても、ともども、公共祭政が、ついぞ、存続してよいのである。

すなわち、必ずしも、浄土の徳恩に感化されるまでもなくして、シャーリプトラ卿、清健に守られてきた性根によっても、また、「アミターユス・未済仁〔悠遠の仁風〕」そのこと、すなわち、如来様の、傘下としてはあらんままに、はたして、佛国土そのことに於ても、なお、諸々の、英魂たちの寄与する、場面が、有りうるであろう。

舍利佛、若シ、善男子・善女人・ニシテ、阿彌陀佛ト、説ケルヲ、聞キ、名號ヲ、執持シテ、若シハ、一日、若シハ、二日、若シハ、三日、若シハ、四日、若シハ、五日、若シハ、六日、若シハ、七日、一心ニシテ、乱レズバ、其ノ人、命終ノ時ニ、臨ンデ、阿彌陀佛ト、諸々ノ、聖衆、現リニ、其ノ、前ニ、在シマサン。是クノ人、終ラン時、心、顛倒セズ、即チ、阿彌陀佛ノ、極樂國土ニ、往生スルコトヲ、得ン。

しかして、およそ、誰か、シャーリプトラ先生、あるいは、世祖とも、あるいは、世母とてもあらん、公達が、たちまち、そのような、「ほとけ」としておった、おおみことから、すなわち、「アミターユス・未済仁〔永遠の仁風〕」のことにもおわされます、それ、如来ご一代の、事に与からん、とこそ、いずれ名のある御方とてこれあるべく、にわかには、臨上ありませるかもしれませぬ。

また、親臨なしたる上からは、いよいよ、思いを凝らすに至るであろう。あるいは、一夜毎にも、あるいは、二連夜でも、あるいは、三夜毎にも、あるいは、四連夜でも、あるいは、五夜毎にも、あるいは、六連夜でも、あるいは、七夜毎にも、すべからく、一向人として、心づもるやはしれぬ。

ここに、あらかじめ、そのような、あるいは、世祖とも、あるいは、世母とも、あった、者こそが、時局に取って、有効あることではあろうが、はたして、そのような、時運に対し、有効なりつつおったものごとを、しかも、外れざるべく、まさに、そのような、「アミターユス」としておわせたる、御仁のこととともあられよう、如来様、すなわち、令名者らの社会が周旋これもうしあげようほどの御方こそが、また、菩薩とも称うべき諸理数さえ遜讓して憚らぬほどの御方として、なおも、その、故壘の上から、ご介立あそばすかもしれぬ。

けだし、そのような、いまだ感乱を被ること無かりし心神にとおかせたる、御方も、なお、時局を通して、ご有効なりませるであろう。いやさ、そのような御方が、あえて、時運自身にと、現効はたされましてや、いよいよ、そのような「アミターユス」としておわせたる、御仁のことにはあられましようはずの、まさしく、如来ご一代の、事に預かりあろう、とて、いまし、「仏国土」そのこと、すなわち、「極楽土」そのものとしておったはずの、「世界」ご自身こそに於て、なおし、恩接できませるやもしれぬ。

舍利弗、我、是クノ、利ヲ、見ルガ故ニ、此ノ言ヲ、説クナリ。若シ、衆生有リテ、是クノ、説ヲ、聞キナバ、應サニ、當サニ、願ヲ、起シテ、彼ノ國土ニ、生マレルベシト。

はたせるかな、シャーリプトラ卿、このような、利準の極致とてある、ものごとを通してこそ、すなわち、重剩しつつではあるにもほかなりませぬが、ここに、直論もうしましょうぞ。

すなわち、実正化なりたる上は、あるいは、宗子本人によっても、あるいは、宗巫涯本体によっても、そのつど、佛国土に於てでは、いずれ、宿願が意識されてあるわざごとがこそ、現効されねばならぬ。

舍利弗、我、今者、阿彌陀佛ノ、不可思議ノ、功德ヲ、讚歎スルガ如ク、東方ニ、亦、阿閼鞞佛。須彌相佛。大須彌佛。須彌光佛。妙音佛。有リ。是クノ如ク等ノ、恒河沙數ノ、諸佛、各々、其ノ國ニ於テ、廣長舌相ヲ、出ダシ、遍ネク、三千大千世界ヲ、覆イテ、誠實言ヲ、説キタマウ。汝等、衆生、當サニ、是クノ、

不可思議功德ヲ、稱讚シ、一切諸佛ノ護念シタマウ所ノ、經ヲ、信ズベシト。

のみならず、当然、シャーリプトラ卿、私自身は、むしろ、そのような砌そのものを通して、すなわち、宛てぶりもうさずもなるまい仕儀とはなるが、さればこそ、シャーリプトラ卿、「さきがけ」とこそおろう、処方涯に於てでも、また、アクションブヤ、すなわち、「無故能」とて、名に聞こえませるのが、如来様におわします。また、更には、メールドゥヴァジャ・マハーメール・メールブラパーサ・マンジュドゥヴァジャ・などの、名を遂げたまうのも、すなわち、如来にはあられます。

このように、諸々の、名だたる御方がたが、シャーリプトラ卿、「ままえ」とてある場、すなわち、処方涯そのものに於ても、また、「ガン河系」という流れや砂数、すなわち、あわぎがはらに喩えられようばかりの、諸々の、ブツダがた、すなわち、「みほとけ」がたとしておかせるのであって、その折々に付けて、諸々の、佛国土をして、味討涯をこそ使用し、暗合せしめたまい、しかも、進歩に、ご寄与くださるのである。

敢行してゆくのは、あなたがたであります。このような、志意するまでもない諸性能からの宛てぶりという、ものごとも、また、なにもかもを自覚できてあらねばならぬ理勢一代に取っては、すなわち、律法という玄理をこそ通して、名を成すに至るであろう。

舍利弗、南方世界ニ、日月燈佛。名聞光佛。大焰肩佛。須彌燈佛。無量精進佛。有り。是クノ如ク等ノ、恒河沙數ノ、諸佛、各々、其ノ國ニ於テ、廣長舌相ヲ、出ダシ、遍ネク、三千大千世界ヲ、覆イテ、誠實言ヲ、説キタマウ。汝等、衆生、當サニ、是クノ、不可思議功德ヲ、稱讚シ、一切諸佛ノ護念シタマウ所ノ、經ヲ、信ズベシト。

このように、「さかしら」とこそおろう、処方涯に於てでも、また、チャンドラスールヤプラディーバ、すなわち、「月粹陽徳光源」とて、名に聞こえませるのが、如来様にあられます。また、更には、ヤシャハプラバ・マハールチスカンダ・メールプラディーバ・アナンタヴィールヤ・などの、名を遂げたまうのも、すなわち、如来にはあられます。

このように、諸々の、名のある御方がたが、シャーリプトラ卿、「まとも」におる廷、すなわち、処方涯そのものに於ても、また、「ガン河畔」という流れや砂数、すなわち、あわぎがはらに喩えられようばかりの、諸々の、ブツダがた、すなわち、「ほとけ」がたとしておかせるのであって、その折々に付けて、諸々の、仏国土をして、味討涯をこそ登用し、幽合せしめたまい、しかも、進化に、ご関与くださるのである。

決行してゆくのは、あなたがたであります、このような、思意するまでもない諸性質からの称ないだてという、ものごとも、また、誰もかれもを自覚できてあらねばならぬ理格一代に対しては、すなわち、法律という真理をこそ通して、名を取るに至るであろう。

舍利弗、西方世界二、無量壽佛。無量相佛。無量幢佛。大光佛。大明佛。寶相佛。淨光佛。有り。是クノ如ク等ノ、恒河沙數ノ、諸佛、各々、其の國ニ於テ、廣長舌相ヲ、出ダシ、遍ネク、三千大千世界ヲ、覆イテ、誠實言ヲ、説キタマウ。汝等、衆生、當サニ、是クノ、不可思議功德ヲ、稱讚シ、一切諸佛ノ護念シタマウ所ノ、經ヲ、信ズベシト。

このように、「まのち」とこそおろう、処方涯に於ても、また、アミターユス、すなわち、「未済仁 [永遠の仁風]」とて、名に聞こえますところが、如来様にあそばす。また、更には、アミタスカンダ・アミタドゥヴァジャ・マハープラバ・マハーラトナケートウ・シュツダラシュミプラバ・などの、名を遂げたまうのも、すなわち、如来にはあらせられる。

このように、諸々の、名だたる御方がたが、シャーリプトラ卿、「あとかた」とこそおろう砌、すなわち、処方涯そのものに於ても、また、「ガン河系」という流れや砂数に喩えられようばかりの、諸々の、ブツダがた、すなわち、「みほとけ」がたのことにおかれるところであって、その折々に付けて、諸々の、佛国土をして、味討涯をこそ挙用し、暗合せしめたまい、しかも、進歩に、ご寄与くださるのである。

敢行してゆくのは、あなたがたであります、このような、志意するまでもない諸性能からの宛てぶりという、ものごとも、また、なにもかもを自覚できておらねばな

ならぬ理勢一代に取っては、すなわち、律法という原理を通してこそ、名を成すに至るであろう。

舍利佛、北方世界ニ、焰肩佛。最勝音佛。難沮佛。日生佛。網明佛。有リ。是クノ如ク等ノ、恒河沙數ノ、諸佛、各々、其ノ國ニ於テ、廣長舌相ヲ、出ダシ、遍ネク、三千大千世界ヲ、覆イテ、誠實言ヲ、説キタマウ。汝等、衆生、當サニ、是クノ、不可思議功德ヲ、稱讚シ、一切諸佛ノ護念シタマウ所ノ、經ヲ、信ズベシト。

このように、「すぎわい」とこそあろう、処方涯に於てでも、また、マハールチヒスカンダ、すなわち、「英邁魁」とて、名に聞こえますところが、如来様にあそばす。また、更には、ヴァイシュヴァーナラニルゴーシャ・ドゥンドウビスヴァラニルゴーシャ・ドゥシュプラダルシャ・デイトウヤサンババ・ジャレーニプラバ・プラバークラ・などの、名を遂げたまうのも、すなわち、如来にはあらせられる。

このように、諸々の、名のある御方がたが、シャーリプトラ颯、「よすぎ」とこそおろう場、すなわち、処方涯そのものに於ても、また、「ガン河畔」という流れや砂数に喩えられようばかりの、諸々の、ブツダがた、すなわち、「ほとけ」がたのことにおかれるところであって、その折々に付けて、諸々の、仏国土をして、味討涯をこそ使用し、幽合せしめたまい、しかも、進化に、ご関与くださるのである。

決行してゆくのは、あなたがたであります、このような、思意するまでもない諸性質からの称ないだてという、ものごとも、また、誰もかれもを自覚できてあらねばならぬ理格一代に対しては、すなわち、法律という公理を通してこそ、名を取るに至るであろう。

舍利佛、下方世界ニ、獅子佛。名聞佛。名光佛。達摩佛。法幢佛。持法佛。有リ。是クノ如ク等ノ、恒河沙數ノ、諸佛、各々、其ノ國ニ於テ、廣長舌相ヲ、出ダシ、遍ネク、三千大千世界ヲ、覆イテ、誠實言ヲ、説キタマウ。汝等、衆生、當サニ、是クノ、不可思議功德ヲ、稱讚シ、一切諸佛ノ護念シタマウ所ノ、經ヲ、信ズベシト。

このように、「したがり」とこそおろう、処方涯に於てでも、また、シンハ、すなわち、「巖獅靈」とて、名に聞こえますところが、如来様にあそばす。また、更には、ヤシャス・ヤシャハプラバーサ・ダルマ・ダルマダラ・ダルマドゥヴァジャ・などの、名を遂げたまうのも、すなわち、如来にはあらせられる。

このように、諸々の、名だたる御方がたが、シャーリプトラ卿、「ましも」とこそあろう廷、すなわち、処方涯そのものに於ても、また、ガン河系という流れや砂数に喩えられようばかりの、諸々の、ブツダがた、すなわち、「みほとけ」がたのことにおかれるところであって、その折々に付けて、諸々の、佛国土をして、味討涯をこそ登用し、暗合せしめたまい、しかも、進歩に、ご寄与くださるのである。

敢行してゆくのは、あなたがたであります、このような、志意するまでもない諸性能からの宛てぶりという、ものごとも、また、なにもかもを自覚できてあらねばならぬ理勢一代に取っては、すなわち、理法という元理をこそ通して、名を成すに至るであろう。

舍利佛、上方世界二、梵音佛。宿王佛。香上佛。香光佛。大焰肩佛。雑色寶華嚴身佛。娑羅樹王佛。寶華徳佛。見一切義佛。如須彌山佛。有り。是クノ如ク等ノ、恒河沙數ノ、諸佛、各々、其ノ國ニ於テ、廣長舌相ヲ、出ダシ、遍ネク、三千大千世界ヲ、覆イテ、誠實言ヲ、説キタマウ。汝等、衆生、當サニ、是クノ、不可思議功德ヲ、稱讃シ、一切諸佛ノ護念シタマウ所ノ、經ヲ、信ズベシト。

このように、「うわざし」とこそおろう、処方涯に於てでも、また、ブラフマゴージャ、すなわち、「靈神韻」とて、名に聞こえますところが、如来様におわします。また、更には、ナクシャトララージャ・ガンドーッタマ・ガンダプラバーサ・マハーラチスカンダ・ラトナクスマサンブシュピタガートラ・サーレーンドラ ラージャ・ラトノートパラシュリー・サルヴァールタダルシン・スメールカルパ・などの、名を遂げたまうのも、すなわち、如来にはあらせられる。

このように、諸々の、名のある御方がたが、シャーリプトラ卿、「まかみ」とこそあろう砌、すなわち、処方涯に於てでも、また、ガン河畔という流れや砂数に喩えられようばかりの、もろもろの、ブツダがた、すなわち、「ほとけ」がたのことにおかれるところであって、その折々に付けて、諸々の、仏国土をして、味討涯をこそ挙用

し、幽合せしめたまい、しかも、進化に、ご関与くださるのである。

決行してゆくのは、あなたがたであります、このような、思意するまでもない諸性質からの称ないだてという、ものごとも、また、なにもかもを自覚できておらねばならぬ理格一代に対しては、すなわち、律法という真理を通してこそ、名を取るに至るであろう。

舍利弗、汝ガ意ニ於テヤ、云何。何ノ故ニ、名ツケテ、一切諸佛ノ護念シタマウ所ノ經ト、為スヤ。舍利弗、若シ、善男子・善女人・ノ有リテ、是クノ、經ヲ、聞イテ、受持シ、及ビ、諸佛ノ、名ヲ、聞カバ、是クノ、善男子・善女人・ハ、皆ナ、一切ノ、諸佛ナリ。ト為ス。共ニ、護念スル所ナレバ、阿耨多羅三藐三菩提ニ於テ、退轉セザルコトヲ、得ルナリ。是クノ故ニ、舍利弗、汝等、皆ナ、當サニ、我ガ語、及ビ、諸佛ノ説キタマウ所ヲ、信受スベシ。

もはや、そのようなことから、何ごとが、認められようか。シャーリプトラ卿、けだし、何ごとという、作用によって、このような、法律をその原理としておる、者、すなわち、誰もかれもを自覚できてあらねばならぬ理勢一代が、なおも、また、名にし負うこととなってゆくのであろうか。

およそ、誰でも、シャーリプトラ先生、あるいは、世祖とも、あるいは、世母とも、おろうほどの、公達ならば、あげて、このような、律法という公理のことである、ものごとを通して、あえて、臨上なりゆかせられることでありましょう。

それはともかく、また、諸々の、「ブツダ」がた、すなわち、「みほとけ」がたの、事に与かるべく、いずれ名にかなうことがらを、択んで、以って、担任せしめこそあるやはしれませぬし、しかも、また、諸々の、「なにもかも」、すなわち、そのような、諸々の、「仁挺人」のこととてあられたる、御方がたとして、やがて、ご存立あそばすでもあろう。これぞ、まさしく、遵守されるべき御方がたとは言えよう。

また、ご存続あらせるにも、いずれ、未央なるべき、サンミヤクサンボーディ、すなわち、正一履道場、すなわち、「ひのもとのくに」の上を、まかりゆかれるのでなければならぬ。

はたせるかな、シャーリプトラ卿、はるかに、信愛心という方途を、拓き往かれる、お姿は、ついぞ、私をして、ひそかに、仰がしめるではないか。

もとより、私の、事に預らん、とてあそばされるはずでもあろうが、それはともかく、諸々の、「ブツダ」がた、すなわち、「ほとけ」がたの、事に与かろう、ともおわすほかはない。

舍利弗、若シ、人有ッテ、已デニ、願ヲ、發シ、今ニ、發シ、當サニ、發シテ、阿彌陀佛ノ國ニ生マレント、欲セバ、是クノ、諸々ノ、人等、皆ナ、阿耨多羅三藐三菩提ニ於テ、退轉セザルコトヲ、得テ、彼ノ國土ニ於テ、若シハ、已デニ、生マレ、若シハ、今ニ、生マレ、若シハ、當サニ、生レルベシ。是クノ故ニ、舍利弗、諸々ノ、善男子・善女人・ニシテ、若シ、信ズルコト有ラバ、應サニ、當サニ、願ヲ發サンニ、彼ノ國土ニ、生レルベシ。

しかれば、およそ、誰か、シャーリプトラ先生、あるいは、世祖とも、あるいは、世母とも、あらん、公達がたにあつては、もはや、そのような、「みほとけ」のことにあられたる、御方としてあそばすも、しかも、また、「アミターユス・未済仁〔遼遠の仁風〕」そのことのこととともあられますべき、如来ご一代の、事に預かるべく、いよいよ、仏国土そのことに於て、なおも、また、つのり心からの立願そのことを通し、こもごも、ご有効ありませることでもありましょう。

しかし、あるいは、そのまま、有効なっていることがらを通してでも、あるいは、ついぞ、ご有効なりませるに、なおし、諸々の、「誰もかれも」ら、すなわち、そのような、遵守されるを要したる、御仁がたとしてでも、これあそばすことができようが、ご存立なりたまわんには、もはや、未央なるべき、サンミヤクサンボーディ、すなわち、公正履道場、すなわち、「ひのもとのに」にこそ於てでなければならぬ。

また、そのつど、佛国土そのことに於て、ご参画できたまうであろうが、この場合、あるいは、諸々の、祝福されんとてあるべき御方がたという途も、あるいは、自らが、嘉祝できたまうという途も、これ、あるであろう。

はたせるかな、シャーリプトラ卿、懇篤たらんが信条の、諸々の、宗子たちによつてでは、あげて、諸々の、宗巫涯どもによつてもこれあらせねばならぬばかりにして、そのつど、仏国土そのことに於てでは、なおし、本願心の知識せられておるわざもの、すなわち、理想郷そのものも、また、しかも、これ、開墾せられあるを要することとなる。



舍利弗、我、今者、諸佛ノ、不可思議功德ヲ、稱讚スルガ如ク、彼ノ、諸佛等モ、亦タ、我ガ、不可思議功德ヲ、稱説シタマイ、而カモ、是クノ、言ヲモ、作シタマワン。釋迦牟尼佛ハ、能ク、甚ダ、難タキ、希有之事ヲ、為シテ、能ク、娑婆國土、五濁惡世ノ、劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁・ノ中ニ於テ、阿耨多羅三藐三菩提ヲ、得タマイ、諸々ノ、衆生ノ為ニ、是クノ、一切世間難信之法ヲ、説キタマウト。

当然、のみならず、シャーリプトラ卿、私としては、むしろ、そのようなことのことにもおわします、諸々の、「ブッダ」がた、すなわち、「ほとけ」がたの、事に預かるべくして、このように、志意するまでもない諸性能を通して、称げふりもうさねばなるまいことにはなるが、さればこそ、シャーリプトラ卿、いずれ、私の、事に嘉せん、ともあられましようはずではあっても、なおし、また、すでに、そのような、「ブッダ」としておかせたる、御仁がた、すなわち、諸々の、「みほとけ」がたが、このように、思意するまでもない諸性質を通して、しきりに、宛てぶりあそばすばかりでもある。

あまつさえ、「高き」を「低やか」に有効あらしめようほどの、ものごとが、また、ほとけ、シャークヤムニ、すなわち、「廉能仙」とも称うべき、「機動性」という君臨主によっても、つぶさに、現効はたされてはあるところでもあったのであって、まさしく、サハー、すなわち、「忍容土」とでも呼ぶべき、世界ご自身に於てでも、また、たちまち、それ、未央たるべき、サンミヤクサンボーディ、すなわち、正一履道場、すなわち、「ひのものとくに」を通し、しかも、権現なりたまわすや、いよいよ、そこに、「なにもかも」という世間さえ安排できてもおらねばなるまい、ダルマ、すなわち、「法律人」ご一代がこそ、趨向せしめられてあられますわけである。

けれど、仮代難に於てでもあらねばならなかったが、また、靈存厄に於てではあるのでもあり、しかも、見当難に於て、すなわち、命在厄に於ておったのでなければならぬが、なお、宿痾難に於てでもあるばかりではあろう。

舍利弗、當サニ、知ルベシ。我、五濁ノ、惡世ニ於テ、此ノ、難事ヲ、行ジ、阿耨多羅三藐三菩提ヲ、得テ、一切世間ノ為ニ、此ノ、難信之法ヲ、説キタルモ、是レ、甚ダ、難タカリキトハ、為スナリ。

しかして、そのようなことが、すなわち、私の、事に預かろう、とてあったばかりではあっても、シャーリプトラ卿、また、「究極なりけれ」をさえ「低やけく」とて現効なすにたるべくはおらんばかりにもあろうのが、もはや、およそ、私によって、これ、つかまつろうはずの、ものごとではあるのであって、まさしく、サハ一、すなわち、「隠忍国」とでも申すべき、世界に於きまして、しばらく、これ、未央たるべき、サンミヤクサンボーディ、すなわち、公正履道場、すなわち、「ひのものとくに」にと、ひそかに、権現はたしまして、ここに、ようやく、「誰もかれも」という世間までも安排できておらねばなるまい、ダルマ、すなわち、「法理人」自身こそが、指向せしめられてありますわけである。

はたして、靈存厄に於てはおらねばならぬのもあるが、また、見当難に於てではあらんところでもあり、もはや、宿病厄、すなわち、命在難に於ておるのではあるが、なお、仮代厄に於ておりもうさんほどになければならぬ。

佛、此ノ經ヲ、説キタマイテ、已ナリキ。舍利弗、及ビ、諸々ノ、比丘等、一切ノ、世間ノ、天、人、阿修羅等ハ、佛ノ説キタマウ所ヲ、歡喜シテ、信受シ、禮ヲ作シテ、而カモ、去リヌ。

このようなことを通して、いよ、弁証あそばしたのも、すなわち、みほとけにはあられました。

知的たるべくもいませる、禧寿人、サーリプトラ、すなわち、優紹子が。それはともかく、諸々の、「ピクシュ」、すなわち、操心人らも、また、それはともかく、諸々の、菩薩、すなわち、仁存人たちこそが。すべからく、それ、半ば、神明なるべき、諸人智という、非神格が幽調たるべくもおらんばかりの、「世間」として、いまし、これ、ほとけの方から、かたじけのう、預からんままに、自叙なりませてわたらせる御方を通し奉り、こもごも、おんまつらいもうしあげましたことではあった。

## 佛 説 阿 彌 陀 經

以上、南都小塔院住職河村俊英訳、漢訳本参照、梵本参考翻訳、阿彌陀經一卷終。